

あぶらむ通信

第46号 2024年12月 あぶらむの会発行
〒509-4121 岐阜県高山市国府町宇津江3225-1
TEL・FAX 0577-72-4219
E-mail : abram@hidatakayama.ne.jp



今年も佳子ちゃんの絵で
(小学4年生)

飛驒便り

2024年、今年も駆け足で過ぎようとしています。皆様にはお元気でお過ごしのことだと思います。本年の年明けは能登半島地震という激しく驚くべき幕開けでした。お屠蘇の酔いでぐっすり眠り込み、目が醒めた途端に第一波の大揺れ、寝惚け半分のため何が起こったのかわからず。第二波はこの飛驒地も震度5弱と大揺れ、窓を開けて逃げ出そうと思ったが女房殿を置いて自分一人逃げたとなれば後で何と言われるかわからないので思いとどまった。揺れる中で家中を探し、でも本人は先に外に出ていました。こちらは被害はないものの能登はご承知のように大変なものでした。しばらくして災害ボランティア登録の電話をしたら、年齢制限でお断り。78歳ではかえって足手まといということなのか!? 年齢制限で断られたのは初めてのことなので少々ショックだった。ならば救護米をと、ささやかながら送り続けている。それにしても何も元旦の日にと思うのだが、地球の暦には線引きはない。ならば「国境」という人為的線引きも地球にはないはず。今年も止むことのなかったウクライナやパレスチナなどの戦禍を見てそう思った。

○定点観測、あぶらむの里から見た気候変化

あぶらむの里の土地取得が1987年、この地に居を得てもうすぐ40年になろうとしている。1990年に宿となるこの建物が完成したその年の暮れ、大工の日当と材料費だけという破格の条件でこの古民家を建ててくれた片町棟梁が、記念と大工さんたちの慰労にと忘年会をもってくれた。夕方5時頃から始まり9時過ぎにお開きとなり帰ろうとして外に出た時、「アッ！車がない！」と一人が叫んだ。宴とともに降り始めた雪が、わずか4時間の間に車を覆い隠し、雪の小山となっていた。「なんと雪の多いところヨ」と言った棟梁の一言が今も私の耳から離れない。飛驒は雪国なのにそこに暮らす人からそんな事を言われたのが、多分ショックだったのだと思う。同じ宇津江の谷筋でも下とここでは2倍ほどの積雪の違いがあることなど当時は知ることもなかった。

その言葉通りよく降った。私も雪国富山の生まれ育ち、三八豪雪も経験し雪の何たるかを知っているつもりだった。しかしここは別格、別次元だった。来る日も来る日も毎日屋根の雪下ろしと除雪の日々、まさに雪との闘いだった。そして雪質の変化。雪の晴れ間に子供たちと雪合戦などして戯れたが、超粉雪のため雪が固まらない。バケツに水を用意して一度水に浸してからの雪玉作りだった。それが2000年、今世紀に入った頃からまず雪質に変化が現れてきた。粉雪からベタ雪へ、雪が水分を含み重くなった。一番被害を受けたのが木々だった。2005～2006年頃、一冬で100本ほどの木々が折れた。粉雪であれば木々の背に積もった雪も、少々身震いすればすぐに落ちたが、ベタ雪はへばりついで落ちることはない。何があっても天に向かってまっすぐ育つ木々には被害はないが、他より少しでも早くそして多く光を得ようと木と木の隙間を狙って横に伸びる姿勢の悪い木々は背に積もった雪の重さと自らの重さであっけなく折れてしまった。その倒木処理だけで数年かかった。

雪質の変化の後にやってきたのが雪量の変化、雪が降らなくなってきた。困ったことの一つが沖縄の子供たちとの「雪祭り」だった。雪のない沖縄の子供たちに雪で遊ばせたい！本土の子供たちを沖縄のあの美しい海で遊ばせたい！」それは私の一の夢だった。20年前、豊見城聖マルコ保育園の園長だった宮城正子姉の尽力で実現した一つの夢、雪と戯れ夢中に

なって遊ぶ沖縄の子供たちの姿は私たちこの雪国に暮らす者にとって、長い冬を生きる大きなエネルギーとなった。正月明けの10日前後の3連休が「雪祭り」の指定日だった。時としてはあまりもの積雪で到着が深夜になったり、無事この地を脱出できるか心配するほど雪が降った。しかしここ数年は雪を求めて三千里の有様、本年はついに1ヶ月遅れの2月10日前後ということになった。（2022年はほとんど雪降らずだった）。

このように雪一つ見ても大きな変化、気温に至っては皆さんもご承知の通りである。世界各地で起こっている大洪水や大干ばつ現象、この大きな気候変動に対して、じゃあどうすれば良いのか私にもわからない。ただ一つ私は意識して実践していることがある。それは「少しだけ便利さをいただいて、あふれるまでの便利さは求めない」。地球への過剰な負荷ということを考えるとき、私にとってできることは1965年～1970年頃の生活と思い実践している。「ものを育て、必要なものは可能な限り自分たちで造る」、田畠を耕したり、ローカルエネルギーの薪を熱源の主軸としているのもそのためである。まだはっきりとは言えないがそんな生活から見えてくるものがある。

○田舎生活に思う少子化現象

ある時講演会での席上、「田舎と都会では何が違うのか」という質問を受けた。私は反射的に「時間」と答えた。その心は「田舎は月年時間、都会は分秒時間」だった。この時間の質の違いが最近いろんな問題にからんできているように思えてならない。少子化問題もその一つのように思う。あぶらむ里山自然学校や里親会を通しての地元養護施設で生活する子供たちとの関わり、また家庭裁判所の補導委託制度による少年との4～6ヶ月の生活補導などあぶらむの働きは子供や少年との関わりが多い。政府は少子化対策として保育園の充実や授業料無償化など様々な対策を講じているが、私には今一つ表面的なものに思えてならない。「ゆっくりと時間をかける」というものが感じられない。物質的には決して豊かとは言えなかった牧師時代に、我が家でこんな珍問答があった。周囲の友達が誰しも持っているのに自分は買ってもらえないことに不満を表した小学生の息子、「うちはどうして買ってくれないの、貧乏だから？」それに対する女房の返答が面白かった。「うちは貧乏なんかではありません」。（じゃあ貧乏ではない証拠を見せろと言う息子）。「それはね、あなたたちが学校から『ただいま』と言って家に帰ってきた時、『おかえりなさい』ってお母さんが出迎えてくれること、それが貧乏じゃないことの証拠です！」と。少々苦し紛れと思ったが、どこかほのぼのとしていて「確かにそうだ！」と納得させられるものがあった。外で嫌なことがあり幼心に傷を負って家に帰った時、母親の「おかえりなさい」の一言で吹っ飛んでしまった自分の少年時代。他方、誰もいない家に帰り、家人が帰るまで一人悶々としなければならない現代の多くの子供たち。どっちが豊かなのだろうか、豊かさとは何なのだろうかと考えさせられてしまう。

田舎生活は「月年時間」。米で言えば 田植えから稲刈り、脱穀まで約5ヶ月。育苗から収穫後の田の手入れを加えれば7～8ヶ月は優にかかる。ものを育てるには「分秒時間」というわけにはいかない。私が危惧するのは現代の私たちの生活に「月年時間」という生活のリズムが失われつつあるとすれば、子供を産み育てるという気の遠くなるような営みは苦痛になるのではないだろうか。そう考えれば少子化や親による子供への虐待などもわかるよう

な気がする。

3年ぶりにやってきた家庭裁判所補導委託制度による家裁少年、孫と同じ年齢だから私たちはジジ・パパ。80歳近くになれば「分秒時間」には対応できず自然と「月年時間」に帰っていく。この年齢的時間と田舎生活のもつ「月年時間」で、少年の体内時計に迫ってみたく思っている。果たして何が生まれるだろうか。これまでの経験で、尖っていた心が穏やかになり食事の食べ方がきれいになることだけは確かと言える。「月年時間」は「忍耐力」を育んでくれるのだろうか。「月年時間のリズムをあなたの生活に！」、あぶらむのこれから働きの一つと思っている。

○青木恵哉師 旅立ちの地 熊本回春病院跡地を訪ねて

私が口ずさむ歌にテレサ・テンの「時の流れに身をまかせ」がある。女房殿は「何それ、女性蔑視も甚だしい」とにべもないが、私は宗教的内容をもったものと思っている。「もしもあなたと逢えずにいたらわたしは何をしてたでしょうか——」、そのあなたに人生における個々の出会いを置き換えてみれば別物になる。

1969年3月6日、私はハンセン病療養所 沖縄愛楽園の創設者青木恵哉師の臨終間際の枕元に呼ばれた。死の苦しみの中で「人生は…」と語られた。大きな大きな人生の宿題をもらった。その一言がなかったら「私は何をしてたでしょうか」と思うと人生における「出会い」ということの大切さ、不思議さをかみしめざるを得ない私だった。

この青木師が残された「選ばれた島」という本がある。現在愛楽園入所者以外で生前の青木先生を知る人は私唯一人となった。2027年、あぶらむの会は創立40周年の記念年を迎える。その記念年までに師の臨終に立ち会った者として、また数少ない語り部の一人として師の偉大な足跡を後世に残すべく、著書「選ばれた島」の映像化を提案し、あぶらむの会の働きとして総会にて支持していただいた。

私はこれまで師の足跡を訪ねて旅をしてきた。故郷徳島の実家、キリスト教に出会った大島青松園、そして沖縄の各地。しかし沖縄に向けての旅立ちの地、九州熊本の回春病院跡は訪ねる機会がなかった。本年6月、たまたま大分での集まりに誘いを受けた。時も時、この機会にと熊本訪問と抱き合せで出かけることにした。1923年関東大震災の直前、師は東京の多磨全生園へ転園するところ、その前に熊本の知人を訪ねることに予定を変えた。これが運命の分かれ道となった。当時、英国の宣教師ミス・ハンナ・リデル女史が私財を投げ打って私設ハンセン病療養所を経営していた。青木師はそこで療養生活を送り、やがて女史の命を受けて病者への伝道師として沖縄へ赴くのである。回春病院跡地は熊本大学本部近くの小高い丘の麓のような閑疎な住宅地にあり現在は老人福祉施設になっていた。しかし本部建物は昔のままだった。また、リデル女史とその後継者として尽力した姪のライト女史が患者の人たちと眠る納骨堂は印象深かった。その環境に佇むだけで30歳前後の自らに与えられた使命に情熱をたぎらせていた師に触れたようだった。この「選ばれた島」の映像化プロジェクト、多くの人々の理解と協力を得て実現したく強く願っている。

どうぞよいクリスマスを、そしてよいお年をお迎えください。

2024年12月 あぶらむの会 代表 大郷 博

ディジタル・ミュージアム「青木恵哉師の働き」の構想

あぶらむの会 理事 山田 益男

自らハンセン病を患いながらも、沖縄のハンセン病者たちに、生きる勇気と希望を与えると共に、地域社会の猛反対に耐えながらハンセン病療養所「沖縄愛樂園」を創設した人、青木恵哉師の足跡を通して、できるだけ多くの人に「人の生き方・生きる姿勢」を学んで頂きたいとの思いがあり、あぶらむの会は沖縄愛樂園を作った青木恵哉師の働きが書かれた「選ばれた島」を題材にした資料を次世代に残すべく映像化して広く発信することを2024年の総会で決議した。「選ばれた島」と大郷先生との出会いがあぶらむの会の原点でもあることから、2027年のあぶらむの会設立40周年の記念事業として位置付けて準備を進めていくこととなった。

大郷先生の映像制作構想は自らが語り部となって青木恵哉著「選ばれた島」を介しての青木恵哉師をはじめとする愛樂園の方々との出会い、ハンセン病がどんな病気で、病者がどのような体験を強いられ生き抜いたかの歴史を、青木恵哉師の足跡、人生の歩みを「選ばれた島」の記述に沿ってその場その場の映像を映しながら解説するというものである。

映像を作るということから、専門家の方の協力を仰ぐ必要があろうということで、7月に関係者による準備会が開催された。席上、映像作家の葛城さんから映像を見せたい対象は誰か、広く一般の人か、あぶらむや教会関係者といった特定分野の人かとの質問が出され、大郷先生は一般向けを考えていると回答された。一般向けであるならば、役者を使ってのドラマ化かイラストによる物語形態でないと難しいとの葛城さんの見解であった。しかし、大郷先生も、山田もその形は希望しないとの意見であった。

多くの人に伝えたいとの思いがあるが、人々の関心事、視点、その深さは様々であることを考えるとき、先の準備会では間口を広くして、多くの人の関心に対応できるようにしたディジタル・ミュージアムを立ち上げ、ホームページのような形態でNet発信する形がよいとの結論に達した。

大郷先生の考えている映像発信は青木恵哉師を知らない人やキリスト教についての関心を持たない人にとって、直には取付き難いであろうことを考えるとき、一般の人たちの目をこの映像に向けさせる準備のステップが必要であると考えられる。日本社会にも社会正義や人道的観点からハンセン病の歴史に关心を持つ人は少なくない。まずは、このような人たちが興味を示してくれるテーマ、病気を恐れるあまり病者たちを社会から隔離し不当に扱った人間の差別意識と非人道的な行動に関する資料提供し、次にハンセン病療養所とはどんなところであったかを示す資料の提供、次に公共施設としてではなく、病者自身の手によって創設された特異な療養所「沖縄愛樂園」を紹介する資料、自分が病者でありながら絶望の中にある病友の救済に尽力し愛樂園を創設した青木恵哉師の人間像を紹介する資料提供へと進み、更には青木恵哉師の偉業を可能ならしめた核心たる師のキリスト教信仰に着目させるように導く。愛樂園や、青木恵哉師に直接関心を寄せる人だけでなく、できるだけ多くの人がアクセスしてくれる環境としてはディジタル・ミュージアムという形態をとるのが最適と思われたからである。

その準備段階として、まず、本年度中に各自が収集する関係資料を一か所に集積する作業

を進め、次に、これらの資料を基にデジタル・ミュージアムの作成に取り掛かることが決められた。その技術担当として斎藤たもつ氏の名があげられ、後日ご本人の承諾が得られたとのことである。

【問題の整理】

先の準備会には制作に関わるスタッフが全員参加できたわけではないので、まず、デジタル・ミュージアム構想について共通理解をしておく必要があることと、会員の皆様にも広く伝える必要があると思うので、私なりの理解、考えを説明し、意見の調整をしておきたい。映像制作のプロである葛城さんや尾崎さんにしてみれば、内容が良くても観る人の心に届かなければ意味がないと考え、広く日本人にメッセージを届けるには、それなりの手法が必要だと考えがあると思われる。先の準備会の際、葛城さんが特定分野の人を対象としたものであれば、大郷先生の考える映像もそれなりに作ることができるが、広く一般の人向けとなると役者を使ってのドラマ化かイラストによる物語形態でないと難しいといっておられた。大郷先生の思いは、青木恵哉師の記録と記憶を後世に残したいというだけでなく、師の生き様を広く今を生きる人々に、また後世の人たちに伝えたいのだと理解する。大郷先生は多くの人に伝えたいとの思いであり、ご自身の作る映像は前述したステップを踏み、社会正義や人道的観点からハンセン病の歴史に关心を持つ人多くの人向けのものとなると考えておられるかもしれないが、一本の映像作品で青木恵哉師の真髄を広く一般の人に、直に届けることはやはり難しいと思われる。

実際、大郷先生の映像を見たいと思う人はすでにハンセン病の問題に关心を持ち、愛樂園についての知識を持った方々、そして青木恵哉師の信仰に关心を持った人々に限られてしまうことを思うとき、広く一般の人達がそこに関心を示してもらうようにするには、デジタル・ミュージアムという場を提供して、広く一般の方々に対してハンセン病に关心を寄せて頂き、前述したような关心の深化を図り、大郷先生の映像に目を向けてもらうように導くことが有効であると思われ、それが人生の旅人たちの宿「あぶらむの会」にふさわしい働きになると思われる。

大郷先生の映像作品は青木恵哉師の真髄を示す最終メッセージが盛り込まれたものであり、総会決議にあるように2027年のあぶらむの会設立40周年に間に合うように時間をかけて制作されればよいであろう。まずは、デジタル・ミュージアムにおいて多くの人にハンセン病に关心を寄せてもらう資料の提供を、また愛樂園についての情報発信を手掛け、人間青木恵哉に目を向けさせる準備を整えるのがよいと思われる。



青木恵哉師「選ばれた島」の初版本。

この本との出会いが多くの若者をハンセン病療養所沖縄愛樂園と結びつけると共に、人生の大きな道標となつた。あぶらむの会もその結びつきの中から生まれた。

高橋秀さんはオートバイ修理の専門家、その技術であぶらむの農機やチェーンソーなどいつも無償で修理してくれる。それだけでなく、あぶらむへ来る子供たちのよき話し相手、遊び相手になってくれる。それも、お茶を濁すような半端なものではなく 真剣に……。大きな支え手です。

教育のあり方とは

クラブマン・ファクトリー 社長 高橋 秀

先生という言葉には、特別な響きがある。「先生」そう呼ばれてみたいと思う人は多いのではないだろうか？オートバイの修理業を営む私もその一人であるが、実は冬期間は先生であったりもする。ひだ流葉スキー場でスキーインストラクターをやっているのだ。とはいって、学校のスキー研修やボーイスカウトなどを教えるアルバイトだが、生徒たちにとって私は立派な先生であることに変わりはない。

さて、教育の話である。近年、依頼を受ける中で一番重視されるのは、子供たちがスキー技術を習得することではなく、怪我をさせずに、それなりに楽しく研修は終わればよし、とする風潮にあるのを感じる。脱落者が出ても、雪の雰囲気を楽しませれば良いと指示をしてくる学校が増えてきているのだ。

正直に話すと、実は私はスキーが上手くない。当然1級や認定指導員くらいは持っているが、特に選手だったわけでもなく、話の成り行きでインストラクターとなった時には、やっとコースを降りてこられる程度の素人であった。あまりにもひどいので、毎日座る間もなく練習をさせられた。なんとかケビにはならなかったのだが、こんな私でも一つだけ自信を持ってできことがある。当たり前にスキーができる人たちと違い、スキーができない人の気持ちが理解できるのだ。どうやらスキー技術の習得に近道はないようで、兎に角たくさん練習をした。大怪我をしてしまったこともある。その内でレベルが上がるにつれ、こうすればできる、ではなく、なぜできなかつたのかがわかるようになった。もちろんスキーをやめてしまえば楽なのだが、一つずつできるようになる、その達成感や喜びは、言葉では表現できないものである。

そんな私であるため、スキースクールから、一番下のレベルのクラスを任せられることが多い。学校からは、この子たちのお守りをしておけということなのだろうが、スクールや私としてはそうはいかない。何せ、この子たちにまたスキー場に来てもらわねばならないのだから。何とかコースを滑れるように鬼の特訓である。私のクラスに落ちてきて、もうスキーをやらなくてよいと思った子たちには「このクラスは這い上がるためのクラスである！」と言い聞かせる。当然、他クラスより遅れているので、休憩時間は短く、立ち上がるのも、コケて外れた板を履くのも、何をするにも自分でやらせるというつもりで手伝っている。適度な緊張感を演出しているのである。しかし、最終日になると、ほとんどの子たちが上級クラス並みに滑れるようになっている。他クラスよりも多くリフトに乗せ、頑張って練習したのだから当然である。ご褒美に希望のコースへ連れて行き、滑りながら流葉山をガイドするのが私のクラスの醍醐味であり、かくして私の味わった、達成感と、あの喜びを共有するのである。生徒たちからのお礼の手紙もよくもらうので、満足度も高いのだと思っている。これが、

学校の指示通り無難に雪遊びで済ませていたら、子供たちはスキー研修に満足できただろうか。

練習はきつい。当然怪我のリスクもある。しかし、そのリスクの責任を取り、教えるのが先生であり、それを育てるのが教育ではないだろうか？危ないから、やらせない、近づけない。それは子供たちの達成感や自信を育むチャンスを奪っているのではないかと思っている。

私の息子もお世話になったが、近年、あぶらむ夏合宿や雪山体験に顔を出すようになった。外で遊ぶ子供たちを見ていると、つい一緒に川や雪に飛び込んでしまう私である。危険なことも学び、それを踏まえて思いっきり遊ぶ。そして学習する楽しさを知る。そんな体験ができる場所もなかなかないようである。

大郷先生のあぶらむの里の教育が続いていくことを願う。

追記

3月に大郷先生に沖縄愛楽園の旅へ連れて行っていただいた。ここでは詳細は割愛するが、沖縄のいろいろな問題を目の当たりにした。私は政治家（先生）ではないが、この問題にどのような答えが正解なのか…。

当然、生徒にも考えるという責任がある。



私と孫とあぶらむ自然学校と

北澤 良

私は、あぶらむ通信に時々登場している北澤佳子の祖母です。

佳子は、小学校1年生から自然学校へ参加し、お世話になっています。今年の自然学校には、佳子の従兄弟の元気な男の子2人が参加し、私にとっては3人の孫があぶらむ自然学校を満喫しました。

私と孫が体験した春の田圃の肥料撒き、生命が躍動する夏の自然学校、大地の恵み秋のキノコ狩り、冬のソリ遊びとかまくら作りに静寂な森の散歩など、自然と共に生きるあぶらむの暮らしや自然学校について、私の思いを綴ってみたいと思います。

(1) 私とあぶらむとの出会い

私があぶらむを初めて訪れたのは、1999年の初夏でした。あぶらむで開催されたポーラ・バトム博士のゲシュタルトワークショップに私が参加したのが、あぶらむとの出会いです。諸魂庵のそばの桐の紫の花が青空に映えて綺麗だったこと、食事の朴葉寿司の緑の朴の葉と白い酢飯と紅い鮭の色合いが、これも綺麗で、私の田舎の柿の葉寿司が思い出され、田植え時期の初夏の御馳走なんだろうなと思いながらいただいたのを覚えています。

日常から少し離れ、里山を吹く風に木々がそよぐのを感じ、鳥のさえずりに耳を澄ますことで、心が穏やかになり、私の鈍っていた感性が蘇った気がしました。

(2) 再びあぶらむへ

再びあぶらむを訪れたのは、2020年10月、ポーラ・バトム博士の愛弟子の俵里英子さんと私と夫と保育園年長5歳の孫の佳子で、秋のあぶらむを訪れました。

私の人生には20年の間に、いろんな出来事があったけれど、あぶらむは何も変わらずそこにあり、私たちを迎えてくれました。

そして次の春、同じメンバーで田植え前の肥料撒きに行きました。夜には、大相撲大会。行司は大郷先生、佳子の山と前田川、佳子が横綱白鵬関と信じた白鵬さんもいて、佳子は喜んで一生懸命に相撲を取っていました。

私にとって、あぶらむは全てを受け入れてくれる場になっていました。そして、その場からたくさんのエネルギーを感じ受け取っていました。

(3) 自然学校へ

私たちは、この肥料撒きの時に自然学校を知りました。1月に6歳になったばかりで、まだ私と一緒に寝ている子が、一人で何日も親元を離れて参加できるだろうかと、私も夫も息子（佳子の父）も心配しました。が、「かわいい子には旅をさせよ。」と思い、大郷先生を信頼して、思い切って一人で参加させることにしました。

自然学校初日、開校式が始まると、佳子は「バイバイ」と言って、後ろも振り向かずサッサと行ってしまう姿に、大人の方が寂しかったです。最初の夜は涙が出たそうですが、美砂さんに背中をトントンしてもらって安心して眠りにつき、次の日からは昼間の疲れでバタンキューだったと聞きました。よほど楽しかったのでしょう。閉校式に迎えに行くと「お迎えが早すぎる」と怒っていました。

親元を離れ一人で、初対面のお兄さんやお姉さん達とプログラムをやり切ったことで、佳子はとても自信がつきました。

2年生になり2回目の自然学校は、コロナの発生があり、双六川の川遊びの前に中止となりましたが、それでも上高地まで行ったこと、夜間に歩いてホタルを見たことが強く印象に残り、帰宅後楽しそうにお喋りしてくれました。

自然学校=楽しい、ワクワク、おもしろい、刺激的と思っている佳子。3年生になると、自然学校の広報として声かけをするようになり、そして友達の同じ3年生の男の子と女の子が参加しました。私は、佳子以外の孫を誘い、4年生の元気な秀くんが参加。五右衛門風呂が嬉しくて、高い所から五右衛門風呂へ飛び込むイタズラをしたそうな。

今年の自然学校は、5年生の秀くんと一緒に2年生の弟の学くんも参加し、4年生の佳子と孫3人が自然学校でお世話になりました。孫たちは、「チヨー楽しい！」「チヨー楽しい！」「アーチャン、楽しいよ」と目を輝かせていました。

じゃがいも掘りをしてミミズを捕まえ、木の枝で釣り竿を作つてミミズをつけて魚を釣り焼いて食べる。真っ暗な林の中で肝試しをして、五右衛門風呂に入って、お腹いっぱい食べて寝る。普段の生活では経験できないことを体験する自然と共に自然学校です。

(4) タブレットを置いて外へ出ようか？

最近、佳子は「学校の授業がつまらない。」と言います。

「私はいろいろやってみたいけれど、学校は危ないから禁止、ダメとなるからつまらない。自然学校のペローダに乗ることや双六川の岩の上から飛び込むことなんかは、学校では絶対

できない。岩に登ることも危ないからダメと言われそう。去年、秀君が双六川で川に入りすぎて低体温症になって、大きなあったかい岩の上にカメみたいにくっついて温まったけれど、あれも学校だったら問題になりそう。ピザも学校でやると、市販の生地を買ってきて、自分たちではトッピングだけの気がする。」「学校はもっといろんなことをやらせて欲しいと思う。危ないからダメダメ言っていると、何もできないし、何もできなくなる。自然学校はいろんなことができる。いろんな事をやらせてくれるから面白いし好き。できる！って自信が湧いてくる。」

「（学校の授業では）理科はタブレットばかり見て、自分の目で観察とかしないから、理科は嫌いになった。タブレットばかり見ないで、観察したり実験したりしたい。」

小学校4年生の9歳の女の子の素直な感想です。自然学校では、生き生きと楽しく命が躍動しているのを感じます。学校では、佳子らしさがかけり、窮屈な場所で型にはめられているのを感じます。タブレットを置いて外へ出ようか。月の動きをタブレットで見て理解した気になるより、外へ出て空を見上げて月を見る方がきっといい。

あーちゃん（佳子の私への呼び方）のおばあちゃんは、お月さまで「今日は何日だ」と言っていたよ。公教育とあぶらむの自然学校は違いがあるのはわかるけど、公教育の何が学校をつまらなくしているのでしょうか。私は佳子の「学校はつまらない」を聞いて、どうしたものかと悩んでいます。

佳子が「今度、あぶらむの五右衛門風呂を焚いてみたい」と言ったことがあります。それを聞いて、私は思い出しました。

私は、田舎の家で暮らしていた時はお風呂を焚いていました。夫もそうでした。が、この60年くらいの間に、お風呂は薪で焚くからスイッチを押すだけになりました。生活の技術が次の世代に継承するのが難しくなりました。便利と引き換えに知恵や技術を軽視し教えてこなかつたことを、私は反省しました。

大郷先生の「あぶらむへの道」にアラスカで出会ったカウンターカルチャー（補い文化）を営む人々についての文章があり、心に響きました。今からでも遅くはないから、機会を見つけては、まずは、私が知っている草花の伝承遊びを子供たちと一緒にやってみよう思います。

(5) 自然は友達

私自身を振り返ると、幼い頃に田んぼや畑のそばでタンポポやスミレの首飾りを作ったり、田んぼでオタマジャクシやタニシを泥だらけになって捕まえたり、冬の山の中で木々の冬芽を見ては楽しんだことが、私の思い出の中の宝物です。不思議にあふれた自然の中で「楽しい」「嬉しい」「悲しい」「大好き」様々な感情を知り、対象（私にとっては友達）をもっと知りたいと思い知識を得ました。そして幼い頃のワクワクした楽しい感情は、体験とともに今も私の心の奥底にあり、私にエネルギーを与えてくれます。

子供たちが、あぶらむの自然学校で、生命あふれる不思議に満ちた自然の中で、成功体験を積み、自信を持っていって欲しいと思います。そして破壊が進む自然を、社会のあり方を考えほしいと思います。

『第12期通常総会 開催報告』

第12期通常総会を2024年3月にあぶらむの里で開催いたしました。多くの方にご参加いただき、心よりお礼を申し上げます。

日 時：2024年3月16日（土）16:00～10:00

場 所：あぶらむの里 母屋

出席者：正会員25名（あぶらむの里11名、リモート参加14名）

総会次第：

- (1) 開会挨拶
- (2) 議長・書記・議事録記名押印人の指名
- (3) 定数の確認
- (4) 議案

・役員の選任(第13期は役員任期2年の1年目です)

* 敬称略

新任理事2名(前田晃伸、長谷川秀司)、退任理事1名(杉木峯夫)

理事：大郷博(代表理事)、前田晃伸、山田益男、西田邦昭、柴原薰、
大郷育、川上美砂、西村正和、長谷川秀司

監事：川上詩朗

- ・第12期活動報告
- ・第12期決算報告及び監査報告

<貸借対照表>

資産合計 97,060,758円 (流動資産54,312,838円 固定資産42,747,920円)

負債合計 62,151円 (短期借入金62,151円)

正味財産 96,998,607円 (うち当期正味財産減少額1,769,948円)

<収支内訳>

収入合計 11,541,176円 (会費収入1,579,000円 寄付収入4,699,484円
研修収入4,054,130円 他)

支出合計 9,771,228円 (減価償却費を除いた実質支出7,890,830円)

当期収支 1,769,948円 (減価償却費を除いた実質収支3,650,346円)

- ・第13期活動計画
- ・第13期予算(案)

<収支予算案>

収入合計 10,680,000円 (会費収入1,500,000円 寄付収入2,700,000円
研修収入5,500,000円 他)

支出合計 12,374,000円 (減価償却費を除いた実質支出10,674,000円)

当日の資料、議事録は、あぶらむの会ホームページに掲載しています。

<http://www.abram-no-kai.com/>

画面右メニュー “会員専用ページ” (パスワード：UTE48) にログインして、
画面右メニュー “2024年総会報告” をクリックしてください。

『第13期通常総会について』

第13期通常総会をあぶらむの里で開催させていただきます。多くの方のご参加をお待ちしています。

2025年度会費納入いただいた会員各位に対して、1月下旬～2月上旬頃に正式案内状を郵送させていただきます。

日時：2025年3月15日（土）16:00～（15:30～受付開始）

場所：あぶらむの里

議案：第1号議案 第13期活動報告、決算報告、監査報告

第2号議案 第14期活動計画、予算案

2024年あんなこと（あぶらむこの一年）

- 1月・ビックリの年明け、能登半島大地震、飛騨地方も震度5弱と大揺れとなるも被害なし
・3日 初仕事。雪のない陽気に誘われて里の落ち葉掃き、重機のバケット4杯分と大仕事。
・16日 この冬一番の積雪、やっと冬らしくなる。
・20日 大寒というのに道路に圧雪された雪が腐り、車の通行危険がともなう。冬というのに気温下がらない。
- 2月・10日～12日 沖縄の子供たちの雪遊び（23名）あぶらむの敷地内でどうにか雪遊びができる。ここ数年で初めてのこと。
・19日 雨、雪ほとんど溶ける。
- 3月・2日 甲藤善彦兄の逝去記念式のため、久しぶりに上京。東京を離れて40年近く、もう自分の居場所はなかった。
・8日 能登の被災地へやっと物資を送ることが可能となり、支援物資として米を送る。災害ボランティアの受付も開始されたので申し込むも、年齢を正直に言ったら断られた。78歳、まだまだ大丈夫というのに…。
・16日 あぶらむの会 定期総会
・19日 沖縄へ。沖縄教区成立70周年式典及び青木恵哉師の「選ばれた島」DVD制作のための下準備交渉のため。この日飛騨地は猛吹雪で陸の孤島となり、沖縄へSOSが入る。
・26日 帰宅、敷地内大除雪。
・29日～31日 日中20℃の気温を記録する。
- 4月・春一番（マンサクの花）咲き始める。半月ほど早い春の訪れ。
・7日 大人のゼミナール「にごゼミ」一行来里（13名）。自然に触れるをテーマに、

秋に集めきれなかった落ち葉を重機のバケット5杯分集め、その一部で落ち葉焚きをし、サツマイモを焼く。

・15日 あぶらむの里 桜開花、例年より半月早い。この日秋田で気温32℃。

・春の訪れとともにイノシシの被害が目立ち始める。

・28日 全国各地で30℃超え、田起こし、畑起こし開始。

5月・3日 田の肥料まき、ジャガイモ植えなど、農作業開始。

・12日 田の仕上げ代、終了。

・18日 田植え。

・31日～6月5日 九州大分、熊本の旅。沖縄愛樂園創設の父 青木恵哉師の足跡を訪ねて、熊本回春病院を訪ねる。

6月・イノシシの被害大きいため、猟師に頼み害獣駆除の許可を得て、罠（ワナ）を仕掛けてもらう。

・15日 罠（ワナ）にイノシシ以外のものがかかる。またこの日から気温31℃と30℃超えの日々が始まる

7月・14日 青木恵哉師の「選ばれた島」映像化に向けての第1回会議を持つ。

・26日 岐阜・生と死を考える会 研修会（11名）

・28日 飛驒地区 里親会、養護施設で生活する子供たちとのデイ・キャンプ（45名）

8月・1日 飛驒地方 梅雨明け。

・2日～7日 あぶらむ自然学校（子供16名、サポーター22名）

・あぶらむの里の木に“ナラ枯れ病”が入り、コナラ11本伐採する。切り倒された木を薪に、2年分の薪が出来上がる。季節外れの作業に汗だく。

9月・9月に入っても連日33℃以上の高温が続く。

・13日 3年ぶりに家庭裁判所より補導委託少年が来る。

・14～16日 立教大学フィリピン・キャンプ（PRC）の合宿（24名）。

・21～22日 稲刈り、9月も下旬というのに34℃。

10月・1日 稲架（はさ）掛け稻脱穀開始。収量は平年よりやや下止まり。

・12日 第10回 持ち寄りコンサート（大人の学芸会）

・13日 第14回 桂歌之助 落語会。この日敷地内の山でマツタケ10本ゲット、宿泊客全員でマツタケ汁いただく。

・18日 地元JA 看護専門学校あぶらむ1日研修

・19日 地元養護施設の子供たちと飛驒地区 里親会とのイモ掘りと落ち葉の焼きイモ大会（45名）

・27日 またまたマツタケゲット。今年はマツタケ大豊作か、1ヶ月で40本ゲット。

11月・8日 気温1.6℃、やっと霜が降りる。これまであまりにも暖かなのでハクサイ結球せず。

・29日 初雪

12月・あぶらむ通信 第46号発行

・白いものがチラホラというのに越冬準備が全く手つかずの今年。

どうぞよいクリスマスを、よいお年をお迎えください。

31年ぶりの再訪

浅香 恵

いつも、あぶらむ通信を送ってくださいまして、ありがとうございます。

2020年7月12日の北日本新聞に「悩み抱えた若者支援 支え合いの心の強さ養う」という見出しが、「あぶらむの宿」の大郷博さんの活動が紹介されていました。これは「あぶらむの里」のことだと思います。

1992年9月に、母と二人で参加した青少年育成指導者研修「乗鞍ユースフォーラム」で、当時の国立乗鞍青年の家の職員の方々に連れられて、あぶらむの里に一泊したのです。広間でいただいた食事がおいしく、楽しく語らいをしました。翌日の宇津江四十八滝がきれいだったのも忘れられなかったのです。

宿に電話したら「以前はあぶらむの里と言いました」とのこと。懐かしくて胸がいっぱいになりました。大郷さんの自費出版本「あぶらむへの道ーその旅の途上で出会った人々」を送ってもらいました。そして、私もわずかですが寄付金を送り、交流が始まりました。

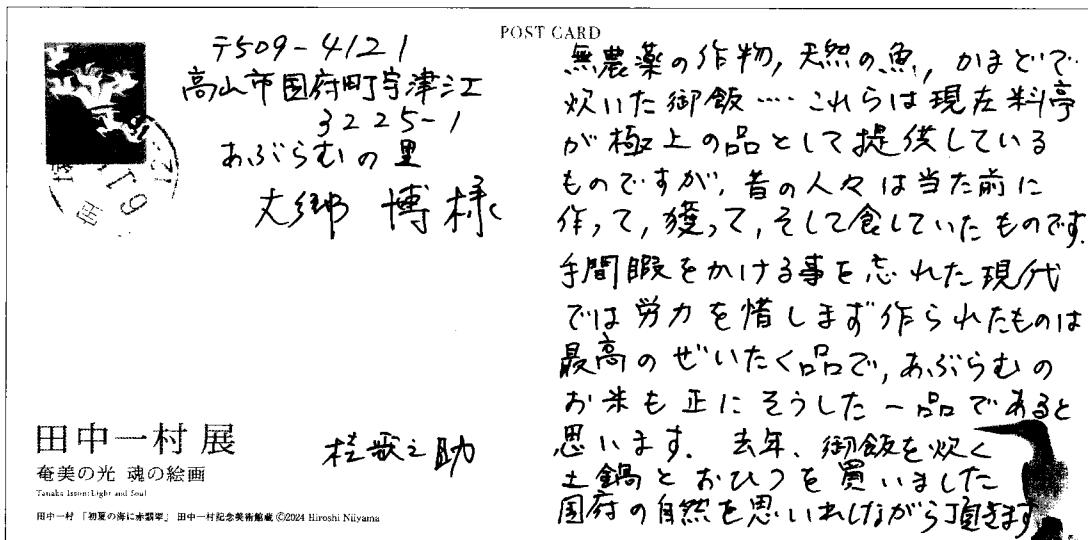
昨年の4月に妹と、名古屋に住む妹の長男一家と31年ぶりに訪れました。大郷さんは宿の前で待っていてくださり、私は感動のあまり玄関で倒れてしまいました。

あの時、一緒に参加した人々は、青少年育成指導者として活躍していると思います。私も、小矢部なぎなたスポーツ少年団の指導者を26年間してきました。母は98歳になり、老人保健施設で元気にはいます。

大郷さんは自ら茶菓を運んで接待してくださり、アラスカにオーロラを見に行った時の話をしてくださいました。奥様の育さんが東京に出張中で会えなかつたのは残念でした。

コナラやスギの巨木の中に佇む、あぶらむの宿です。これからも、いつまでも、心の宿として続けてほしいと願います。

(富山県小矢部市在住 北陸児童文学協会会員)



2025年 こんなこと（行事予定）

現在確定、予定しているのは下記の通りです。その他は決定次第、あぶらむのホームページにてお伝えします。

<http://www.abram-no-kai.com/>

- ・2月22日～24日 あぶらむ冬の自然学校（予定、雪があれば良いのですが…）
- ・3月15日（土） 第13期通常総会（場所：あぶらむの里）
- ・5月17日～18日 田植え（予定）
- ・7月26日～31日 あぶらむ里山自然学校（今年は7月末開校予定です。ご注意ください）
- ・8月6日～9日 被爆80周年記念「広島－長崎 平和ウルトラマラソン」サポート
- ・9月27日～28日 稲刈り（予定）
- ・10月11日（土） 持ち寄りコンサート－大人の学芸会－
- ・10月12日（日） 第15回 桂歌之助落語会 in あぶらむの里
脱穀（予定）

||||| 寄付者（'23年12月12日～'24年12月10日）敬称略 |||||

安藝淳二／秋本光一郎／阿久津富男／浅香恵／新家恵子／池淵透・真理子／石原つや子／市川聖マリヤ教会／一柳典利・百／伊藤浩子／井本正樹／岩沢満／岩田幼稚園／上原成和／鵜川久・貴子／鵜川雅行／江見淑子／遠藤淳治／遠藤祐規／太田丞慈／大西修／岡田賛三／岡登信義／荻野登／鬼本博文／小野田恵子／葛城豪／上瀧大／岸本望／木ノ内伸子／木俣貞子／久保田彰／倉石昇／倉持章子／河野正司・マリ子／河野道太／小堀ひろ子／小柳證／坂尾千恵子・新一／坂本吉弘／佐々木淳／笹部昭博／佐藤さつき／座間美法子／澤野正裕／静谷英夫／島文子／清水幸平／下地道子／杉浦進・恵美／スクランブルkk／鈴木暁／鈴木和子／鈴木重雄／鈴木保子／鈴木知子／須間栄津子／五月女文枝／園部千恵子／高瀬留美／高野優・永／高橋秀／橋政興志／館野裕之／田中真理子／棚原恵正／谷口茂雄／谷章子／俵里英子／丹安紀子／中部学院大学／坪井令夫商店／露木充／寺田信一／遠山章夫・秀子／直井雅子／東京セントポールライオンズクラブ／中島務／中嶋陽子／中谷洋明・知英子／中村力・英子／中村正明／中村芳枝／西井たか子／根本利子／野田修助・和子／野田修治・洋子／長谷川勉・百合子／長谷川秀司／長谷川牧子／畠井正春／羽根英子／速水直子／光安啓明／平田美知枝／藤井和彦／藤井誠・ひろ子／藤田町子／古川斎／星野一朗／前田晃伸／松井勲／松戸聖パウロ教会／三沢悠子／宮城正男・正子／宮古聖ヤコブ教会／宮本房江／三好利和／三好洋子／宗像千代子／メリエネ（フランス）／諸岡研史／八木克道／矢部直美／山本直子／湯田啓一

||||| 物品寄付者（'23年12月12日～'24年12月10日）敬称略 |||||

（株）アリミノ 田尾兵二／安心プランニング 中村洋／クラブマンファクトリー 高橋秀

|||||会費納入者 ('23年12月12日～'24年12月10日) 敬称略 |||||

相沢牧人／赤井充也／秋本光一郎／秋山献之／朝野恵美子／朝比奈誼／穴井悦子／雨宮寿子／飯島千津子／飯田孝太郎／池淵透・真理子／石原博之・幸子／一柳典利・百／伊藤尚洋／伊藤宣子／伊東日出子／伊藤浩子／今関公雄／入江努／岩崎海大／岩佐英夫／岩佐癸史子／岩沢満／岩田全弘／岩間光雄／上田敏明／上村誠／鵜川久・貴子／鵜野勝教／大久保幸枝／大房健樹／岡田タイ／岡登信義／小川卓／小野裕／笠井正志／笠原雅子／葛城豪／加藤園子／加藤正／加納美津子／唐木田麻起子／河合昇／川上詩朗・美砂／川上玲子／河田健二／川満すわ子／岸本望／北澤茂良／鬼本博文／金城真生／金城由美子／久世治靖・知子／倉辻明男／栗山盛雄・洋子／黒田則子／小池直子／小泉恵子／河野憲嗣／小林賢三／小松純一／小柳證／斎藤寛明／酒井厚子／坂本澄夫・純子／笛岡純也・由紀子／佐々木国夫／佐藤純／佐藤哲典／佐藤芳子／座間幹生／沢野弥生／塙田純子／篠宮慶次／柴原薰／渋沢一郎／島文子／清水幸平／清水喜子／下地道子／下田英一・由香／下畠幹／シモン小川智子／神保和子／杉浦進・恵美／杉木峯夫／杉村進／杉本良平・和子／鈴木暁／鈴木重雄／鈴木知子／鈴木信子／鈴木保子／砂川博秋／聖母訪問会本部／仙敷正俊／園部千恵子／染谷孝章／高瀬留美／高野優・永／高橋保／高濱友理江／高柳真／田口清吾／竹中浩／田中篤／棚原恵正／谷倉祐二／谷利子／俵里英子／丹安紀子／友野和子／豊永泰子／長坂尚／中沢泰／中台信子／中野良春・えり子／中村洋・久美子／中山美世子／中谷洋明・知英子／長谷幸雄／七瀬谷重男／新倉俊吾・久乃／濁川孝志／西口喜久枝／西口晃／西村正和／野田修助・和子／萩尾出穂／長谷川秀司／畠井正春／播磨裕治／福田桂・亜矢子・一太／藤井誠・ひろ子／吉市進／古川秀昭・昭子／星野一朗／星野直子／前田晃・広世／前田晃伸／前田容子／前田眞智子／松井明子／松井勲／水谷勝／宮城正男・正子／宮崎秀貴／宮嶋眞／宮脇加代子／三好洋子／武藤六治／宗像千代子／八木克道／矢後正子／山内寿美子／山崎美貴子／山田益男／湯田啓一・千秋／渡辺洋一

|||||新規会員 ('23年12月12日～'24年12月10日) 敬称略 |||||

岩佐英夫／鵜野勝教／大久保幸枝／加藤園子／河野憲嗣／シモン小川智子／谷倉祐二／中沢泰

《「あぶらむの会」について》

「あぶらむの会」は旧約聖書創世記に出てくる、信仰の父アブラハムの旅立ちの前の名前、「アブラム」に由来しています。それによれば、彼はその内的必然性故に、安住の地を離れて「行く先知らずして」旅立ちました。全てに対してあまりにも安定を求める今日、私たちは旅としての人生に臆病になり、旅に必要な能力を欠いているように思われます。

「あぶらむの会」は、自己の人生に果敢に挑戦し、人生の良き旅人を育てるため、それに必要な訓練や出会いの場を提供してゆくことを目的としています。